3. 妻木晩田遺跡の弥生時代墳墓についての一考察

1. 課題の設定

妻木晩田遺跡では、弥生時代後期を中心とする居住域とともに、同時期の墓域が調査されている。墓域に関する調査研究は、妻木晩田遺跡の集落像を具体化する上で不可欠なデータであり、重要な課題の一つでもある。従来、山陰地方における弥生時代墳墓の研究は、四隅突出型墳墓の平面形態の分析を軸に進展しており、その起源と変遷については一定の成果が得られている。ただ、資料的な制約もあり、調査が行われた少数の事例を広域的にピックアップすることで、ある種の傾向を導き出しており、四隅突出型墳墓なるものが、一つの集落内、あるいは地域の墳墓構成の中でどのように位置づけられるものなのかは十分に検討されていない。一方、近年では、副葬品の分析から、弥生時代墳墓の特質や地域性を考察した会下和宏氏の論考や（会下 2000）、埋葬施設の構造や周辺から出土する祭祀に使用された土器の分析から、埋葬祭祀の復元を試みる渡辺貞幸氏の論考（渡辺 2004）など、新たな視点からの研究も行われている。

本稿では、こうした研究の現状をふまえた上で、同時期の居住域と墓域とのセット関係がある程度把握しうる妻木晩田遺跡を材料に、一つの大規模集落内における墳墓のあり方を考察する。検討すべき項目は多々あるが、妻木晩田遺跡で墳墓の様相がある程度把握しうる弥生時代後期中葉（Ⅴ－２期）を軸に、居住域と墓域との位置的関係、墓域内の墳墓構成、さらに墳墓構成と集団との関係などについて考察してゆきたい。

2. 墓域と居住域

妻木晩田遺跡の立地する丘陵は、小規模な開削谷の存在により、複雑な地形をなしている。東西方向に平行してのびる妻木丘陵と晩田丘陵、さらに松尾頭南丘陵を加えた３つの丘陵が、弥生時代のおもな集落域である。

このうち、弥生時代の墳墓が検出されたのは、丘陵西側の洞ノ原地区、仙谷地区、及び松尾頭地区である。本論では、各地区の墳墓群を洞ノ原墳墓群、仙谷墳墓群、松尾頭墳墓群と称する（図１）。

妻木晩田遺跡では 17 万㎡におよぶ発掘調査成果により、墓域と居住域との関係が、ある程度判明している。両者の関係が把握しうるⅤ－１期からⅤ－２期にかけては、丘陵先端部付近は墓域、丘陵幅が広くなる東側は居住域という区別がみられる。

時期ごとに両者の関係を整理すると次のようになる。

Ⅴ－１期は、妻木晩田遺跡における集落形成開始期にあたり、墳墓群西側の丘陵先端部には環壕が掘削される。環壕には居住域が伴わないことが想定され、背後の洞ノ原墳墓群とともに「象徴的な空間」を形成していた可能性が指摘されている（濱田 2003）。同期の居住域は、妻木新山地区のほか、妻木山地区、松尾頭地区に散在している。墓域は、洞ノ原墳墓群であるが、最も近い妻木山地区の竪穴住居からは、直線距離で約 460 mの距離にある。

Ⅴ－２期には居住域が妻木新山地区、妻木山地区、松尾頭地区の全域に広がるなど集落の拡大期にあたる。洞ノ原地区では、環壕が維持されなくなり、洞ノ原墳墓群でも８号墓を最後に築造されなくなる。一方、新たに仙谷墳墓群で造墓が活発化する。妻木晩田遺跡で最も墳丘規模の大きい仙谷１号墓がこの時期に築造されている。これらの墳墓は、最も近い竪穴住居から、直線距離で約 450 mの距離にある。

Ⅴ－３期は集落の最盛期にあたり、各地区で竪穴住居群が展開する。ところが、当該期の墳墓は確認されていない。Ⅴ－２期に活発化した仙谷墳墓群の造墓活動は、この時期にほぼ終息したとみられ、墓域が他の丘陵へ移動したものと考えられる。

Ⅵ期は集落の衰退期にあたり、妻木山地区を中心に各

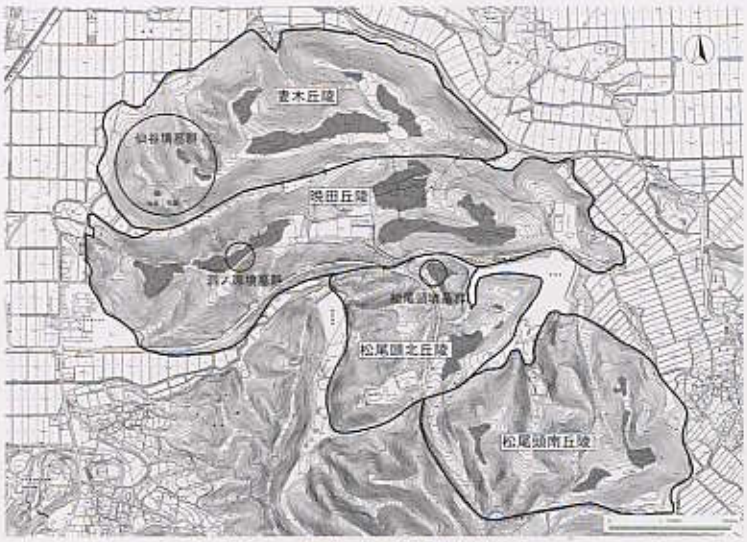
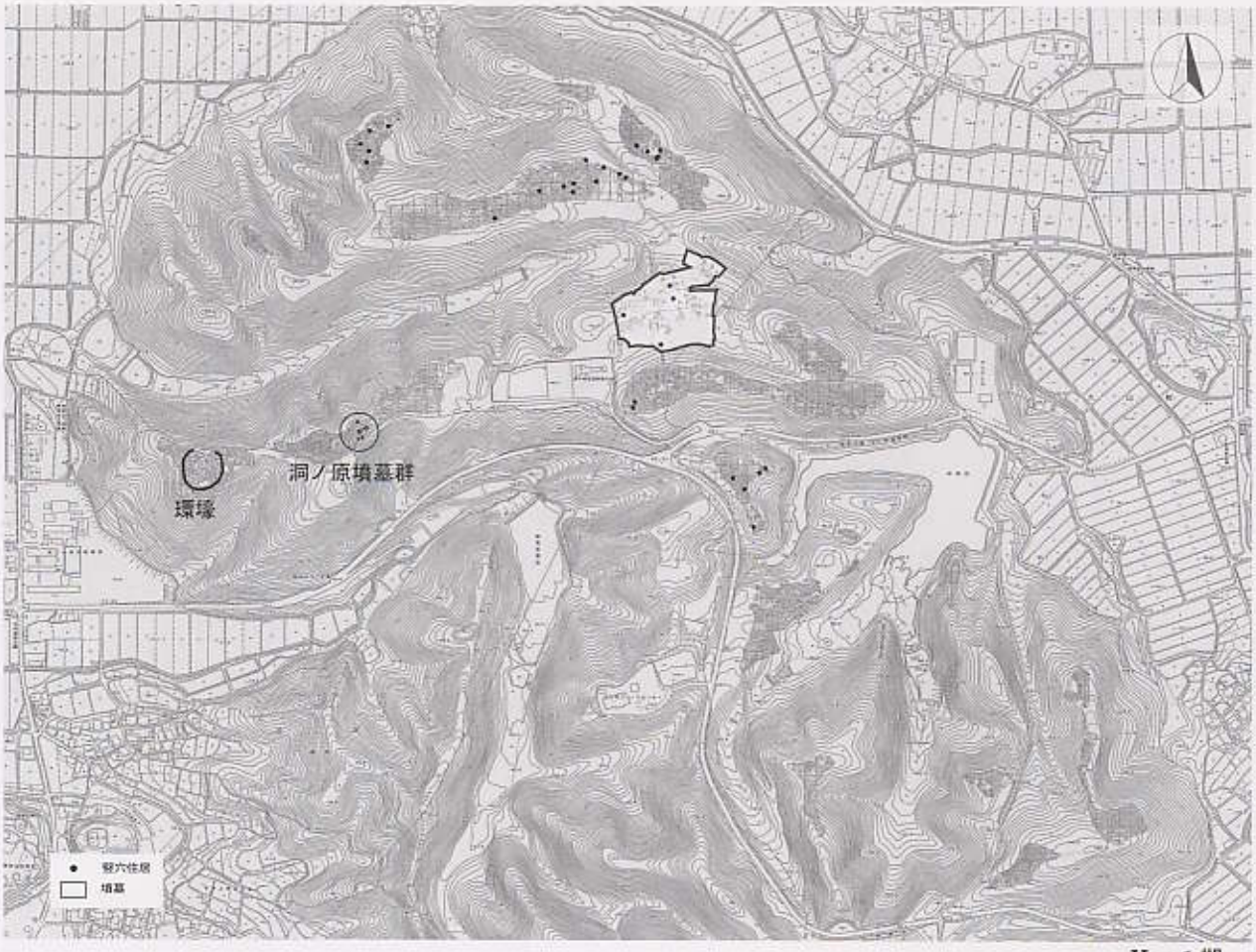
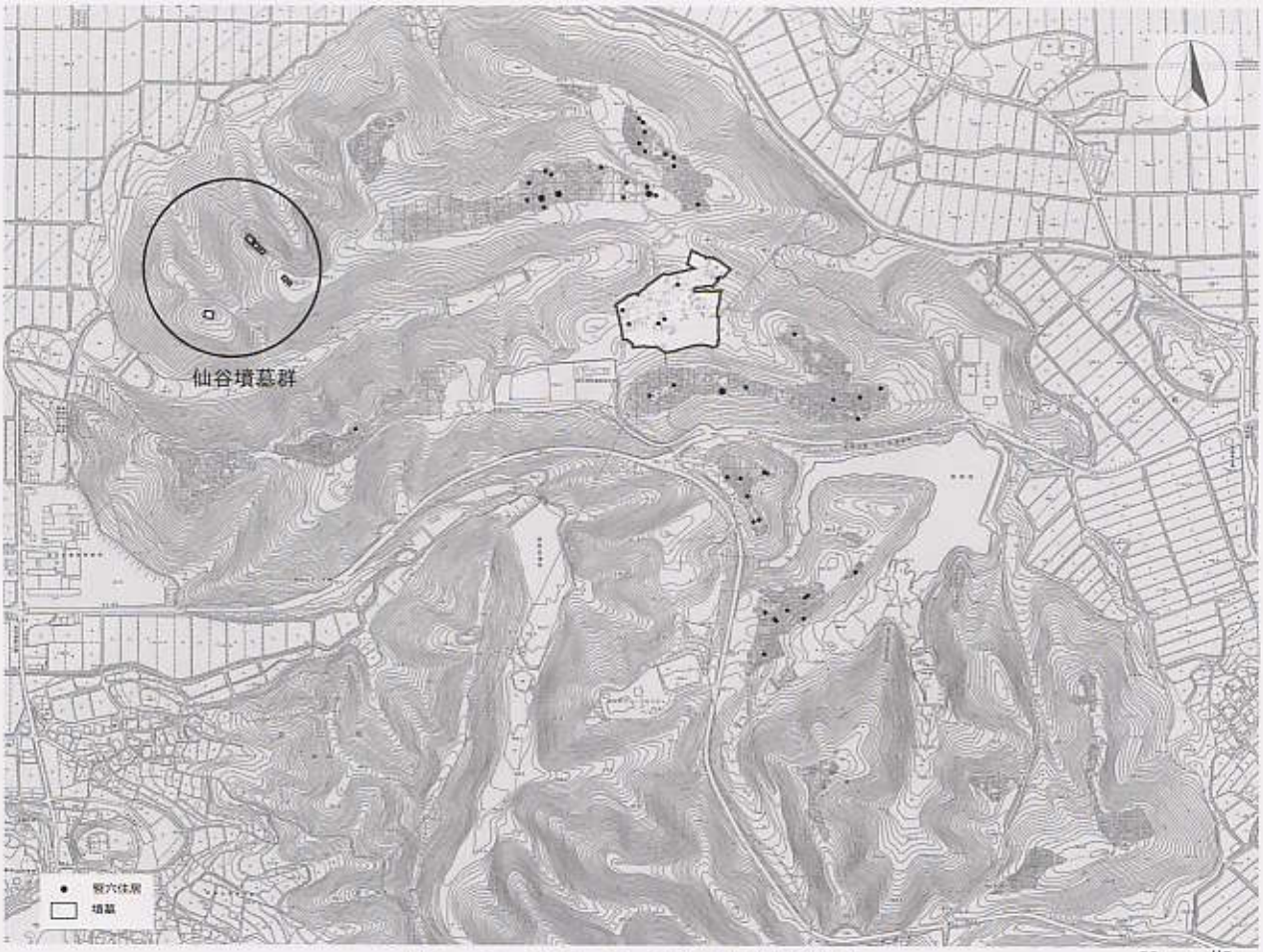


図１　妻木晩田遺跡全体図



V－1期



V－2期

図2　V－1期、V－2期の墓域と居住域　　1:13000

地区で竪穴住居が散在する。墳墓は、松尾頭３区で２基、仙谷２区で１基が調査されている。おもな居住域は、北側の妻木山地区および南側の松尾頭地区である。松尾頭墳墓群とは谷を隔てており、直線距離で約 150 mある。

妻木晩田遺跡の居住域と墓域との関係を時間軸に沿い整理したが、注目される点は、居住域と墓域が一定の距離、もしくは地形をもって完全に区別して存在していること、および、墓域が土器１型式程度の時間幅で移動していることである。

竪穴住居群の分布が比較的広範囲に及ぶため、実態として居住域という認識が当時の人々にあったかどうかはわからないが、墓域がこうした竪穴住居群とかなりの距離をもって存在し、かつまとまって構築されていることは墓域に対する強い認識を窺わせる。

３．後期中葉（Ｖ－２期）の墳墓構成

ここではＶ－２期を主体とし、かつ、妻木晩田遺跡における弥生時代墳墓の特色が抽出可能とおもわれる、仙谷墳墓群に注目する。

仙谷墳墓群のうち、調査が行われたのは、妻木丘陵から北西方向に派生する尾根上の仙谷１、２区および、西側に派生する尾根頂部にある仙谷１号墓である。分布調査では、１号墓周辺の２つの尾根、および１区北側の尾根でも墳墓の存在を示唆する地形を確認しており、周辺の尾根上に墳墓が連続的に存在するものとみられる。

各墳墓の立地と墳丘形態に注目すると次のように分類される。

＜立地＞

Ⅰ類　丘陵の頂部に立地するもの（１号墓）。

Ⅱ類　派生する尾根の斜面に立地するもの（２～７号墓）

＜墳丘形態＞

妻木晩田遺跡では、墳墓の大半が、地山削り出しと数十cmの盛土により墳丘構築をおこなったとみられ、本来的に低いマウンドであったと思われる。こうした墳丘の平面形と外装施設について検討する。

１類　平面が四隅突出形、もしくは方形の墳丘をもち、墳丘または墳裾部に貼石・列石を伴うもの。（１～３号墓）

２類　方形の墳丘をもつが、墳丘または墳裾に貼石や列石をもたないもの。（５号墓）

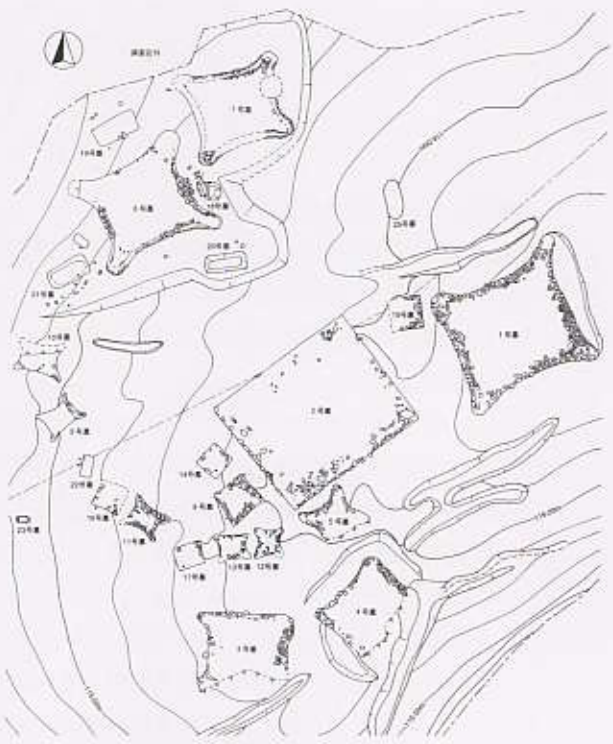
３類　方形の墳丘を指向したものと思われるが、明瞭ではなく、尾根部を切断する溝などにより埋葬空間を区画するもの。（６・７号墓）

この分類を基礎に、仙谷墳墓群を次の３種に大別した。すなわち、立地Ⅰ類、墳丘１類をもつもの（Ａタイプ）、立地Ⅱ類、墳丘１類または２類をもつもの（Ｂタイプ）、立地Ⅱ類、墳丘３類をもつもの（Ｃタイプ）である。比較的細い尾根筋が派生する地形からみて、未調査地における墳墓も、概ねＢまたはＣタイプに類するものと思われる。仙谷墳墓群は、Ｖ－２段階の墓域としては完結性が高いことが想定されることから、この３つの類型が仙谷墳墓群の墳墓構成を反映したものと考えられる[1]。

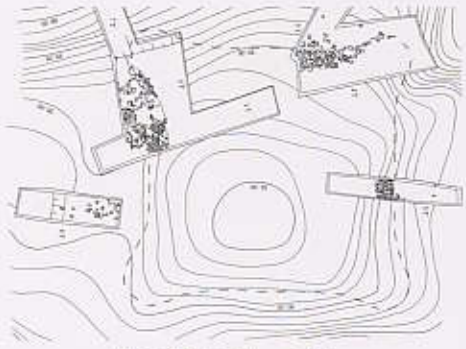
一方、Ｖ－１期の洞ノ原墳墓群や、終末期の松尾頭墳墓群はどのように理解されるであろうか。洞ノ原墳墓群は、幅約 20 mのなだらかな丘陵先端部に位置する。大小 25 基の墳墓が群在しており、立地１類、墳丘１類のＡタイプである。周囲に同時期の墳墓が確認されていないため、どのような墳墓構成に中に位置づけられるのかわからないが、南西側の尾根にＢ、Ｃタイプが存在するのかもしれない。

松尾頭墳墓群は丘陵頂部付近に２基の方形墳墓が築造されている。隅部を除いてコの字形に周溝が掘削されており方形の墳丘を呈する。立地は１類、墳丘は２類にあたる。終末期にみられる墓制の一類と思われるが、今後周辺地域の終末期墳墓を理解する中で位置付ける必要がある。

このように、妻木晩田遺跡の弥生Ｖ期の墳墓には、おおむね３つの類型があることがわかってきた。その解釈については、Ａタイプの仙谷１号墓が妻木晩田遺跡で最大規模の四隅突出型墳墓であること、一方、Ｃタイプの仙谷６、７号墓は、細い溝のみで埋葬空間を確保しており、外装施設もないこと、さらに、Ｂタイプが両者の中間的様相を呈すること、からみて、Ａタイプ－Ｂタイプ－Ｃタイプの順で被葬者に区別が存在したことが認められる。伯耆地域でこうした分類がまとまって検証できる良好な遺跡は、現状ではない。米子市尾高浅山遺跡は丘陵頂部に位置する１号墓（四隅突出墓、Ａタイプ）と北東側斜面部の３、４号墓（Ｂタイプ？）は、一見類似し

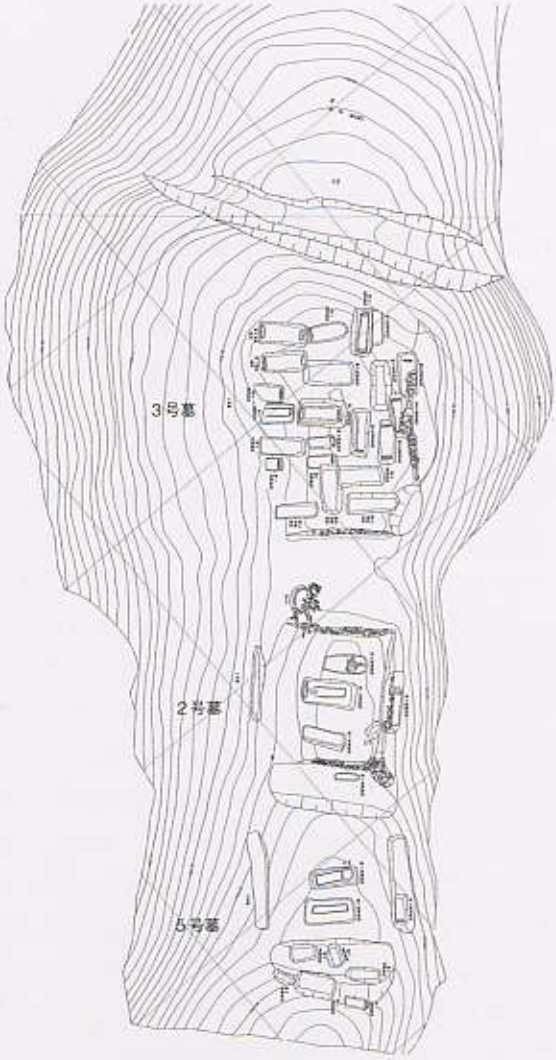


洞ノ原墳墓群（Ⅴ－１・２期）



仙谷１号墓（Ⅴ－２期）

松尾頭墳墓群（Ⅵ－２期）



仙谷墳墓群１区（Ⅴ－２期）

仙谷墳墓群２区（Ⅴ－２、Ⅵ－１期）

図２　妻木晩田遺跡の弥生時代墳墓　（Ｓ＝１／４００）

た一例にみえるが、Ⅴ－１期の１号墓に対して、３、４号墓がⅤ－３期であるなど、築造時期が異なっており直ちに適用できない。

４．墳墓からみた居住域の集団構成

Ⅴ－２期の仙谷墳墓群の分析から３つの類型を抽出したが、この墳墓構成は同時期の居住域にはどのように反映しているのであろうか。

この時期のおもな居住地である、妻木新山地区の竪穴住居に注目すると、竪穴住居数棟で構成される居住単位[2]が反復されたであろうまとまりが、おおむね３つのグループとして把握される。それぞれ５～８棟の竪穴住居群で構成されるが、注目すべきは、床面積が10～20㎡のものが15棟と最も多い一方で、30㎡を越える、大型の住居が３棟みられることである。グループＡに２棟、グループＢに１棟の大型住居が存在している一方、グループＣにはみられないなど、その保有形態は、居住単位ごとに差が認められる。妻木晩田遺跡では、こうした大型住居がⅤ－２期に現れ、集落最盛期となるⅤ－３期に顕在化する（高田2003b）。

こうした、竪穴住居群の中にみられる大型住居の解釈として、集落内における共同の作業場（近藤1959）、もしくは、複数の世帯を統括する長老あるいは家長の家（都出1989）、居住単位内での家長世帯の住居（高田2003b）、とする見解がある。妻木晩田遺跡では、大型住居跡から遺物が出土することは少なく、出土遺物を根拠にその性格を推定することは難しい。ただ、墳墓の類型にみられた被葬者間の取り扱いの差違は、当然居住地内でのあり方に起因するものと考えるべきである。その意味では、大型住居を居住単位内でのリーダーの住居と捉えて居住域内での階層性の存在を認めた方が、集落構造を合理的に解釈できると考えるのである。

居住単位ごとに大型住居の保有形態に差があることは、居住単位ごとのステイタスの違いを表すものかもしれない。墳墓構成との対応関係について、想像をたくましくすれば、居住単位内の大型住居に住むリーダーやその世帯がＢタイプ、さらに複数の居住単位を束ねるリーダーやその世帯の存在を認めてよいなら、これらの人々がＡタイプの墳墓に埋葬される、といった姿を描くことができよう。

５．墳墓からみた階層分化の進展

墳墓と居住域の分析から、弥生時代後期の集落構成員に一定の階層性が存在することを述べてきた。ここでは、こうした階層分化の進展度合を集団墓からの離脱の程度という尺度でみてみたい。

一般に、弥生時代前半期の墓域はその群在性や副葬品の質や量などから、集落構成員を分け隔てなく埋葬した集団墓地として理解される。これが中期以降終末期にかけての特定の地域では、突出した規模をもつ方形周溝墓や、いわゆる弥生墳丘墓が出現するなど、集団墓地から独立した特定個人墓が存在する様相が明らかになっている。弥生時代後期における大規模集落の構造を解明する上で、こうした集団墓地から特定個人墓が顕在化してゆく流れをどのように理解し、位置付けるかという作業は重要な課題である。

洞ノ原墳墓群はＡタイプである。周囲で同時期のＢ、Ｃタイプは確認されていないが、他のタイプとは区別された特定の集団を埋葬した墳墓であることは理解される。一辺４～８ｍの四隅突出型墳墓の周囲に一辺１～２ｍ前後の小型の墳墓が群在する。丘陵頂部の１号墓、２号墓は墳丘形態が異なるが、出土土器の検討から、ほぼ同時期の築造と考えられている（濵田2002）。埋葬施設は調査されていないが、１・２号墓の検出状況の所見によれば、墳丘中央付近にその存在が想定されている。視覚的に大小の墳墓が群在する状況や、１～２基の墳墓構築を契機に周辺に同質の墳墓が短期間に形成される過程は、群在する方形周溝墓のありかたと類似している（都出1989、山岸編1991）。Ｂ・Ｃタイプの墳墓とは区別されつつもその内部構成は集団墓的であるといえる。

一方、仙谷１号墓周辺の詳細は不明だが、地形からみて周囲に同様の墳墓が群在する余地は少ない。直下の尾根に想定される墳墓を加味しても、集団墓的な色彩は薄い。Ⅴ－３期の居住域では、大型掘立柱建物の出現、大型住居を中心とする居住単位の顕在化、鉄製品の増加など複数の視点から、家長世帯を中心とする階層的な社会構造が想定されている（高田2003b）。仙谷１号墓の状況からみれば、その前提としてⅤ－２段階に家長世帯同士の格差が進展していたことは想定されてよい。これは居住単位ごとに大型住居の保有形態に差がみられる状況とも整合する。ただ、この問題解決には、仙谷１号墓、

図４　Ｖ－２期の墓域と居住域

および周辺墳墓の内容も含めた調査、検討をおこなってゆく必要がある。

6．まとめ

妻木晩田遺跡の調査成果を材料に、居住域と墓域との位置関係、墓域内での墳墓構成・集団の階層性を検討してきた。検討結果をまとめると次のようになる。

・墓域は居住域から500ｍ前後の距離、もしくは地形をもって明確に分離された位置に形成されており、土器１型式前後の比較的短い時間幅で別丘陵に移動している。

・墓域内の墳墓は、立地・墳丘形態の分析から３つに類型化され、これらが一時期の墓域を構成したものと考えられる。

・こうしたＶ－２期の墳墓にみられた階層性は、同時期の居住域の構成を投影したものと理解すべきである。その際、居住単位にみられる大型竪穴住居の存在は重要であり、居住単位を代表するリーダーの存在を想定させるものである。

・Ｖ－１期の墳墓は、居住単位のリーダーやその世帯が集団墓域からピックアップされることにより墓域に分化が生じた段階と評価される。これがＶ－２期には、仙谷１号墳墓の出現や居住単位間に階層差が生じる状況から、さらなる階層分化が進展したことが想定される。

弥生後期の墳墓は、各地の事例からみてきわめてバラエティに富むと思われる。集団墓からの発展過程についても地域ごと、または集落ごとに異なるプロセスが想定される。本論では妻木晩田遺跡における一時期の墓域の検討から墓域内の構成を導き出したが、こうした結果が他の地域、または他の大規模集落にそのまま適用できるかはわからない。集落構造は、立地する地形や気候、地域の社会状況により大きく変動するものとみられることから、各事例で個別に検討すべきであろう。

残された課題は多いが、集落最盛期であるＶ－３期の墓域の探求、仙谷１号墓周辺部の墳墓の内容確認は、重要な課題である。　（岡野雅則）

註

（１）こうした墳墓のほか、木棺墓群、土壙墓群など墳丘をもたない墓の存在が想定されるが、妻木晩田遺跡では検出されていない。周辺の弥生時代の遺跡においても同時期の確実な例は今のところみられない。

（２）妻木山地区におけるＶ－３期の集落構造の分析では、丘陵高まり部の肩部を中心に、竪穴住居数棟と掘立柱建物からなる居住単位が反復する様相が把握されている（高田 2003a）

参考文献（引用文献のみ掲載）

近藤義郎 1959「共同体と単位集団」『考古学研究』６巻１号

都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』

山岸良二編 1991『原始・古代日本の墓制』同成社

渡辺貞幸 2004「弥生首長墓の構造と祭儀－中国地方の事例について－」『島根考古学会誌』第 20・21 集合併号

会下和宏 2000「西日本における弥生墳墓副葬品の様相とその背景」『島根考古学会誌』第 17 集　島根考古学会

高田健一 2003 a「妻木晩田遺跡における弥生時代集落像の復元」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2002』

高田健一 2003 b「妻木晩田遺跡の集落像」『山のムラ妻木晩田、海辺のムラ青谷上寺地』とっとり弥生文化シンポジウム資料

濱田竜彦 2002「洞ノ原墳墓群に関する一考察－洞ノ原１号墳・洞ノ原２号墳出土土器の再検討を中心に－」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2001』

濱田竜彦編 2003『史跡妻木晩田遺跡第４次発掘調査報告書－洞ノ原地区西側丘陵の発掘調査－』

妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2004
発行日　2005年3月
編　集　鳥取県教育委員会事務局
妻木晩田遺跡現地事務所
〒689-3324 鳥取県西伯郡大山町妻木 1115－4
TEL（0859）37-4000
発　行　鳥取県教育委員会
印　刷　（有）米子プリント社